

1982年フィンランド大統領選挙 (3)

Finnish Presidential Election in 1982(3)

坂 上 宏

【要 約】

1982年フィンランド大統領選挙で、マウノ・コイヴィスト (Mauno Koivisto) が当選を果たしたことは、前任者ケッコネン大統領 (Urho Kekkonen) の25年に及ぶ長期支配に名実共に終止符を打ったという意味において、フィンランド政治史上大きな転換点となった。

コイヴィストが大統領の座を手中にするための大きな一歩となった出来事は、彼が1979年5月に二度目の首相に任命されたことであった。本稿では、まず第二次コイヴィスト内閣編成の経緯について概述した。次に彼の首相就任をめぐる政治状況について、ケッコネンを始めとする有力政治家の利害関心、隣国ソ連の姿勢、さらに世論の動向などを取り上げて議論した。

【目 次】

はじめに一問題の所在

序論 フィンランド大統領

(以上 『九州情報大学研究論集』 第1巻第1号)

第1章 ケッコネンの黄昏 —— ケッコネン五選とケッコネン政治

(以上 『九州情報大学研究論集』 第5巻第1号)

第2章 コイヴィストの黎明 —— 第二次コイヴィスト内閣の成立をめぐる政治状況

第1節 国会選挙と組閣の経緯

第2節 コイヴィストの首相就任をめぐる政治状況

(以上本号)

第2章 コイヴィストの黎明

一 第二次コイヴィスト内閣の成立をめぐる政治状況

第1節 国会選挙と組閣の経緯

1979年フィンランド国会選挙は、3月18日～19日に実施された。この結果を受けて、2ヶ月以上後の5月26日に第二次コイヴィスト内閣が任命された。ここでは、この選挙の背景と結果、そしてその後の組閣の経緯について記しておきたい。

この選挙の前に内閣を率いていた人物は、社民党党首カレヴィ・ソルサ (Kalevi Sorsa) であった。当時彼は、次期大統領候補の一人と目されていた有力政治家であり、社民党のみならず共産党系の人民民主連盟の中にも支持者が多く、さらに労働組合内部でも大きな発言力を持っていた。つまりソルサは、当時の左翼勢力側において、その政治力や経歴の面で他の追随を許さないほどの存在であったのである¹⁾。

ところがすでに1978年末頃から、彼の内閣は行き詰まりの様相を見せていた。例えば二大与党の社民党と中央党は、主要官僚の任命や対ソ関係の処理について主導権争いをしていた²⁾。さらに政府と労組の所得交渉は、「所得上昇保証」(ansiokehitystakuu)をめぐる難航していた(79年1月9日合意)。また野党は、サロラ＝ヴァルコ社 (Salora=Valco oy) の贈賄問題に関連して、ソルサの告発を要求していた。そしてソルサ自身、腰痛という健康上の問題を抱えていた。こうした様々の難局に直面してソルサは、選挙前の1979年2月にケッコネン大統領に対して、選挙後も引き続き内閣を率いる意志のないことを伝えていた³⁾。

さらに経済不況が、選挙戦において野党の格好の攻撃材料になった。例えば工業生産の停滞、失業の深刻化、債務の増大といった問題である。すでに1978年8月にソルサ内閣は、総額40億マルッカの支出から成る景気刺激策を発表していた。しかしその効果が目に見える形で表われるのは、次のコイヴィスト内閣になってからであった。したがって選挙結果については、与党の後退、そして野党第一党国民連合党の勝利が予想されていたのである⁴⁾。

1979年国会選挙は、このように与党には逆風の中で実施されたのであった。各党が獲得した議席の数は以下の通りである。

与 党		野 党	
社民党	52(54)	国民連合党	47(35)
中央党	36(39)	キリスト教連盟	9(9)
人民民主連盟	35(40)	農村党	7(2)
スウェーデン人民党	9(9)	その他	1(2)
自由人民党	4(9)		
計	136(151)		64(48) ⁵⁾

※括弧の数字は、前回1975年9月21日～22日に実施された選挙で各党が獲得した議席数。

この選挙では、上記からわかる通り与党がほぼ軒並み後退したのに対し、野党の国民連合党や農村党といった保守政党が躍進した。この結果についてコイヴィストは、「野党は、今までとは別の政治が必要とされていると選挙戦で訴えた。確かに野党は勝利したけれども、依然として国会では少数派にとどまっており、与党が引き続き国会過半数を占めている。したがって野党の希望(入閣)は実現されないだろう」(括弧は筆者)⁶⁾と論評した。これは、大方の見方と軌を一にしていた。つまり社民党と中央党を軸と

する左翼中道連立内閣が引き続き政権を担当するだろうというものである。

保守の国民連合党がその議席を増やした理由については、政府への批判票が流れたためと考えるのが妥当であろう。さらにもう少し踏み込んで言えば、1956年以来のケッコネン大統領の支配に対する批判票と見ることも可能かと思われる。国民連合党は、一般的にはソ連より西側との関係を重視する傾向が強く、ケッコネンが標榜する親ソ中立外交に対して他の政党より距離を置いていたこともあって、1964年に発足したヴィロライネン保守連立内閣 (Johannes Virolainen、1964年9月12日～66年5月27日、連立政党は、中央党・国民連合党・スウェーデン人民党・人民党) 以来、政権からは除外されていた。したがって1979年選挙における国民連合党の勝利は、ケッコネン長期体制に対する国民の倦怠感あるいは変革への要求の発露とも考えられる。

そもそも1978年11月にケッコネンは、保守政党が選挙で勝利すれば大統領を辞任するとまで述べていたように、「保守・反ケッコネン勢力」に対して強い嫌悪感を持っていた⁷⁾。また後述する通り、ソ連側は国民連合党の台頭を警戒していた(次号予定)。しかしながら同党が勝利したと言っても、与野党間の力関係を覆すには至らず、結局のところ次に述べる通り、閣僚人事を一新した左翼中道連立内閣が存続することになるのであった。

さてこの当時のフィンランドにおける組閣プロセスを大掴みに言えば、大統領が内閣首班を指名し、その人物のもとで各党間の協議を経て、大統領による内閣任命に至る。以下では、第2節以降の議論の背景を理解するために、第二次コイヴィスト内閣の成立経緯について辿ること

にしたい。

組閣に向けて最初の表立った動きは、まず1979年4月9日にケッコネンが、国民連合党のホルケリ党首 (Harri Holkeri) を「組閣人」 (*hallitusmuodostaja*) すなわち内閣首班として組閣の任務を命じたことである。ところがホルケリはこれを断ったので、ケッコネンは、一段レベルを落とした「組閣調停人」 (*selvittelija*) として、多数派内閣の形成の前提を明らかにせよとの任務をホルケリに与えたのであった。いずれにせよ事実上の内閣首班の指名である⁸⁾。この指名は、ケッコネンが国民連合党の勝利という選挙結果に配慮を示したためであると言えなくはない。しかしながら彼の本心は、左翼中道内閣の継続にあり、ソ連が警戒する国民連合党の政権参加ということは、あまり眼中になかったようである。また、与党社民党や共産党系の人民民主連盟は、選挙戦の時からやはり現在の左翼中道内閣の維持を主張しており、イデオロギーが異なる保守の国民連合党との連立は望んでいなかった。

同じく与党の中央党も、特に親ソ色の強い実力者のカルヤライネン (Ahti Karjalainen) を支持するグループが、国民連合党との連立に難色を示していた⁹⁾。さらに中央党の中には、国民連合党が社民党と提携し、その結果中央党の政治力が低下することを懸念する声もあった。ただ党内では、入閣をめぐる議論が錯綜しており、後述の通り下野を望む者や国民連合党との保守連立内閣の結成を唱える者もいた。しかし結局こうした意見は、中央党の大勢を占めることができなかったのである。したがってこれらのことを踏まえて言えば、もともと国民連合党の入閣の可能性は乏しかったのであり、ケッコネンもこの点を承知していたと言えよう。つ

リケッコネンは、ホルケリによる組閣作業が失敗することを見越した上で、一応は民意を尊重する姿勢を示して、彼を「組閣人」に指名したという政治的便法をとったと考えられなくはないのである。

ホルケリ主導の組閣協議は、各党間の合意に至らず、彼は4月18日にケッコネンへその旨を伝えた。翌19日ケッコネンは、新たに国会副議長のヘッレ (Veikko Helle、社民党) を「組閣立会人」(*hallitustunnustelija*) に指名し、多数派内閣の形成と政策方針の作成の可能性を明確にする任務を与えた¹⁰⁾。この指名の場合、ヘッレの任務の性格は各党間の調整を行うことにあり、内閣首班としてのものではないと考えられる。

この後ケッコネンは、休暇を取りスキー旅行へ出かけ、組閣に関して表立った動きを見せなかった。しかしその間も彼は、首相候補について熟考していたようである。結論的に言えばケッコネンは、5月11日にコイヴィストを「組閣人」(*hallitusmuodostaja*) に指名するのであるが、巷間では彼のほかにも首相候補として、すでに言及した有力政治家の名前が取りざたされていた。例えば社民党ではソルサ、中央党ではカルヤライネン、ヴィロライネンといった人物である。彼らは、知名度が高く政治的経験も豊富であり、次期首相候補のみならず次期大統領候補とも目されていた。しかし1979年時点でケッコネンは、自分の出身政党の中央党から前記二人を次期首相に据える意向は持ち合わせていなかったようである。この点を裏付けているのは、下記のケッコネンとソ連大使館のウラディミロフ参事官 (Viktor Vladimirov、彼はKGBの高官であり、フィンランド問題の専門家であった。フィンランド語を流暢に使いこな

して、フィンランド各界の要人との関係を構築した)とのやりとりである。ウラディミロフは、ケッコネンに対して中央党の大物カルヤライネンやヴィロライネンの名前を首相候補として言及したのであったが、ケッコネンは「カルヤライネンは信頼できない」、ヴィロライネンについては「外交が出来ない」と切り捨てている¹¹⁾。そもそも外国大使館員が他国の首相人事について、その国の最高指導者と意見を交換するということは異例なことのように思えるが、これは、ケッコネン時代のフィンランド・ソ連関係における一断面を示していると言っていいだろう。ウラディミロフは、フィンランドの外交問題や政権人事問題などに関して、フィンランドの要人と事あるごとに接触している。その目的は、フィン・ソ関係の現状を維持することであり、このため彼は、必要に応じてソ連側の見解を伝えている。こうしたウラディミロフの言動が、フィンランド側の姿勢にいかなる影響を与えたかということが問題にされるべきであるが、ここでは深く立ち入らない。いずれにせよ後節で述べる通り、ケッコネン時代には、他国の主権の核心部分に立ち入っていくソ連側の姿勢と、フィンランドの政治アクターがそれを時には撥ね付け、時には受容し、そして自己の政治意思を実現するために巧みに利用していった、という外交と内政の連関が見いだせるのである。

ケッコネンは、1979年5月7日から11日にかけて西独を訪問したが、帰国するやいなや早速ヘッレから組閣に関する報告を受けた。その後ケッコネンは、内閣府でソルサ社民党党首とヴィロライネン中央党党首と協議し、この後引き続き大統領公邸でソルサと協議した。この協議終了30分後、ケッコネンはコイヴィストを大統領官邸に呼び、「組閣人」つまり内閣首班に指

名したのである。ケッコネンによれば、コイヴィストは少し説得されて首相の職を引き受けることに同意した。のちにケッコネンは、「私は、その時ほど首相候補について熱心に考えたことはなかった」と難航した首相指名について語ったという¹²⁾。コイヴィストがケッコネンから与えられた任務は、ヘッレが主導した組閣協議の内容に基づいて、多数派内閣を形成することであった。

コイヴィストは、組閣方針について「政治の内容を変えることが望まれないのであれば、人物を変えることだ」¹³⁾と述べている。つまり左翼中道連立という骨格は維持しつつ、閣僚の顔ぶれの一新を図るということである。この点についてコイヴィストは、各党間の組閣協議の場で、ソルサ内閣の連立構成を踏まえて、当時の五つの与党(社民党・中央党・人民民主連盟・スウェーデン人民党・自由人民党)による連立内閣を提案した。政策面に関する各党間の協議では、例えば森林業にかかわる税制について、中央党と社民党・コイヴィストとのあいだで相違があったものの、一定の妥結が図られた¹⁴⁾。しかしながら組閣協議は遅々として進展せず、後で述べるように業を煮やしたケッコネンは、「コイヴィスト首班案」を撤回しようとする動きさえみせたのであった。協議が停滞した理由については、コイヴィストが優柔不断で決断力が不足しているからだと言われた。組閣協議に参加したある人物は、コイヴィストが自分の哲学について無駄話を行い、全く意味がなかったという不満をケッコネンに伝えている¹⁵⁾。

しかし問題とされるべきは、中央党側の姿勢であろう。つまり組閣をめぐる中央党内部の様子は、錯綜としていたのである。同党内外で囁かれていた組閣の観測は、選挙で勝利した国民

連合党と社民党が提携して保革連立内閣を発足させるというものであり、そうなれば中央党の影響力低下は免れないだろうと言われていた。このような理由もあって、同党の中の親ケッコネン勢力は、左翼中道内閣の存続を望んでいた。しかし同党の右派の中には、国民連合党の入閣について賛意を示す者もいた。さらに右派の中には、左翼政党に所属する人物(コイヴィスト)が首相に就任することに反対する者があり、加えてイデオロギー的には隔たりが大きい人民民主連盟との連立にも拒否反応があった。そして選挙で敗北を喫した以上、下野すべきだとの意見も出されていたのであった。また党首のヴィロライネンには、組閣協議を意図的に引き延ばしている様子が見受けられた。その理由については、ヴィロライネンが、組閣協議を暗礁に乗り上げさせて、結果的に自分に首相の座がころがり込んでくることを画策していたのではないかと推測されている¹⁶⁾。もちろんヴィロライネン自身は、そうした野心を明言していないものの、後述する通りケッコネンがヴィロライネンに対して入閣を断念させたという事実が、権力欲に裏打ちされたヴィロライネンの政治的計略の傍証になっている。コイヴィストは、こうした中央党内部の雑然として入り組んだ状況について、「彼らはお互いに協議していない」と述べ、「ヴィロライネンとの協議は全く進展がない」と困惑していた¹⁷⁾。

組閣協議の「閉塞状態」に直面してケッコネンは、下記の通り直接的に組閣プロセスに身を投じることになる。コイヴィストは、5月22日までに組閣を終了させるとケッコネンに約束したが、これが果たせなかった。ケッコネンは24日までの猶予を与え、そしてこの日までに組閣が実現できない場合、「次の段階に移行する」と

コイヴィストに伝えた。ケッコネンは、「次の段階」の意味について、コイヴィストに言明しなかったが、第三者にケッコネンが語ったところでは、現ソルサ内閣の暫定政権、あるいは暫定的な官僚内閣の発足ということであった。これは、事実上のコイヴィスト首班指名の撤回を意味する。このケッコネンの強硬姿勢が功を奏したのか、23日にコイヴィストは、「組閣協議は一致した。あとは最終的な溝が残っているだけだ」と組閣が最終段階に入ったことを電話でケッコネンへ伝えたのであった¹⁸⁾。

ケッコネンの組閣工作は、中央党にも仕掛けられた。特に「反ケッコネン」と目されていた党首ヴィロライネンへの攻勢は強烈であった。そもそも1979年国会選挙の前にケッコネンは、「ヴィロライネンはすべての政治的工作から退くべきだ」¹⁹⁾と語ったほど、ヴィロライネンと氷炭相容れない関係にあったのだが、密かに首相の座を狙っているとされるヴィロライネンに対してケッコネンは、「次期内閣に入閣しないよう希望する」と5月19日に書簡で伝えたのであった。ヴィロライネンは、これを自分に対する引退勧告として受け取ったと回顧録の中で述べている²⁰⁾。ヴィロライネンの構想は、首相就任をバネにして、「ポストケッコネン」の大統領レースを有利に進めることであったとするならば、上記のケッコネン書簡には、そうしたヴィロライネンの大統領選挙へ向けた野望を押さえ込みたいという意図が伏在していたと言えるかもしれない。さらに当面の問題である組閣に関して言えば、組閣を引き延ばそうとするヴィロライネンの動きを封じ込めれば、事態は収束するだろうとのケッコネンの読みがあったことも指摘できるのではないと思われる。

5月20日にヴィロライネンは、次のように入

閣しない旨を電話でケッコネンに伝えている。

「与党社民党と中央党が選挙で敗れたことに加えて、大統領は私（ヴィロライネン）だけではなくソルサにも組閣の任務を与えていないため、私が入閣する理由はない」（括弧は筆者）。なおこの電話会談でヴィロライネンは、ケッコネンから国会議長の職を勧められて、「ケッコネンは、もともと自分（ヴィロライネン）がすべての政治的工作から退くべきだと言っていたから、これには驚いた」（括弧は筆者）と述懐している²¹⁾。

さて組閣へ向けて残された大きな障害は、中央党内部の入閣反対勢力であった。結論から先に言えば中央党は、組閣成立の前日5月25日に開催された党代表者会議で投票を行い、79票－49票で入閣方針を決定したのであった。ヴィロライネンによれば、当初は出席者の多くが下野論に傾いていたのであったが、最終的に入閣賛成票が上回った。その理由は、第一に中央党へ配分された閣僚の数が6で、これは社民党より一つ多く、さらに非政党の官僚出身の閣僚一人を加えると、非社会主義政党が閣内で多数を占めるようになったことである。つまり与党間の力関係が中央党に有利に傾いたことが、同党内の入閣反対派の説得材料となったのである。第二にすでに述べた通り、中央党の主張する森林業にかかわる税制改革（森林税引き下げ）に社民党が歩み寄ったことである²²⁾。

ケッコネンは、この中央党代表者会議に先立ち、中央党が入閣を否決した場合の対応について、ヴィロライネンへ次の三つの選択肢を伝えている。「①秋まで現ソルサ内閣を存続させる。②準政治的な大統領管理内閣を発足させる。③大統領を辞任する」。果たしてケッコネンは、本当に辞任するつもりであったのかは定かではな

い。なぜならば「辞任」をちらつかせつつ、自己の計算通り事態を進展させようとする手法は、彼の政治行動の中でたびたび見られるからである。なおヴィロライネンは、上記の選択肢について代表者会議で報告しているが、「大統領辞任」については、その影響が大きいと判断したのか開示していない。この会議でヴィロライネンは、4回も演台に登り、入閣を促す主張を力説した。入閣に反対する空気がいかに強かったか伺えよう。最終的にヴィロライネンは、投票で決着をつけることを提案し、前記の結果で中央党の入閣方針が決定されたのである²³⁾。(他の政党は、中央党が入閣の方針を決定した同じ5月25日にスウェーデン人民党と人民民主連盟が、前日24日には社民党が同様の方針を決定している。しかし自由人民党は、閣僚ポストや政策などで他党と折り合いがつかず、入閣は見送られることになった。)

かくして1979年5月26日土曜日、大統領主催の臨時閣議が開催され、第二次コイヴィスト内閣が任命されたのであった。同年3月の国会選挙から68日目に幾多の曲折を経て、ようやく新内閣の誕生に至ったのである。1968年以来2度目の首相に就任したコイヴィストは、「内閣は、国民や国家の信頼を得ている。しかし貴殿の支持が必要だ」とケッコネンに伝えた²⁴⁾。なお次期大統領の候補者と見られていた社民党のソルサ党首、中央党のヴィロライネン党首そしてカルヤライネンは、下野することになった²⁵⁾。各党の閣僚数は下記の通りである。

中央党 6、社民党 5、人民民主連盟 3、
スウェーデン人民党 2、非政党 1

今まで述べてきた組閣プロセスから読み取れることは、各政党や政党内部グループ、各有力政治家などの国内諸アクターの利害関心やイデ

オロジーが対立、交錯し、そして隘路に行き当たり、それをケッコネン大統領が強力な政治力で打開してきた末に、ようやく組閣が成立したということである。そもそも新たに発足した第二次コイヴィスト内閣を含めて、歴代内閣の大半が、多政党間の連立によって運営されてきた。与党間の紐帯は、必ずしも強固なものであったとは言えず、しばしば大統領の下支えを必要としたのであった。換言すれば閣内不一致が生じやすいだけ、大統領に恣意的な介入を起こさせる余地を生んだとも言える。このことは、ケッコネンの政治力が強大なものになった一つの所以であったわけである。

この第二次コイヴィスト内閣成立の過程で見られたケッコネンの強権ぶりについて、印象的なエピソードを以下に記しておく。組閣が完了に近づきつつあった5月24日に開かれたケッコネン・コイヴィスト会談は、コイヴィストを極度に感情的にさせるものであった。彼の言葉を借りれば、ケッコネンに対して「本当に融和的になれなくなり」、「血液中にアドレナリンが高まってきた」のであった。この会談でコイヴィストが怒りを抱いた理由は、ケッコネンがあからさまに組閣に干渉したからであった。コイヴィストによればケッコネンは、入閣が望ましくない4人のリストを提示した。その4人とは、中央党のカルヤライネン、ヴィロライネン、社民党のソデルマン (Jakob Söderman)、残りのもう一人は中央党の人間であるが、コイヴィストはその名前を明かしていない。さらにケッコネンはコイヴィストに対して、組閣があまりに手間取るのであれば、新内閣の任命を延期して、現ソルサ内閣を継続させるか、あるいは「少数派内閣」を発足させることも考慮していると語った(「少数派内閣」とは、中央党と国民連合

党を中心とする保守連立を指すものと思われる)。またケッコネンは、閣僚の人事にも具体的に容喙した。それは、外相には中央党のヴァユリュネン (Paavo Väyrynen)、内相には中央党のウーシタロ (Eino Uusitalo) を据えよというものである。2人とも政治的にケッコネンに近い人物として知られている。コイヴィストは回顧録の中で、自分は内閣首班として組閣に「広範な権限を持っており、事態はうまくいった」、「首相の権限は全く制限されている」、「懸案は首相の頭ごなしに処理すべきでない」と述べて、組閣に対するケッコネンの露骨な干渉を指弾している²⁶⁾。

ところでケッコネンの‘威光’は、1970年代末期に至って翳りを見せ始めていたようである。彼については、高齢であることと健康不安が顕在化しつつある中で、引退が取り沙汰されるようになっていた。他方コイヴィストに対する国民の人気は、高まっていった。そして実際の政治闘争の場では、対抗者がケッコネンの威光にひれ伏すどころか、反旗を翻す事態も生まれるようになったのである。例えばわれわれは、1979年6月のヴィロライネン発言を発端とするケッコネンとヴィロライネンの軋轢 (第4節予定)、1981年における二度の政府危機の際に起きたケッコネンとコイヴィストの対立 (次章予定) の中にケッコネンの威信の低下ぶりを見いだせるのである。しかしながら少なくとも第二次コイヴィスト内閣の成立を考える上で、ケッコネンの役割は決定的に大きなものであった。つまりケッコネンは、依然として政治的には他を圧倒する存在であったのである。

首相就任の当初コイヴィストは、「任期満了の四年間は持たないだろうが、歴代内閣の平均寿命である一年くらいは、自分の内閣を維持させ

たい」という希望を語った。これに対して外国貿易相に就任したレコラ (Esko Rekola) は、「二ヶ月持てば一年過ぎても生き長らえるだろう。一日ごとに内閣の平均寿命に近くなるだろう」と答えている²⁷⁾。このコイヴィストのいさか心細い言葉からも伺える通り、首相としての彼の立場は盤石なものではなかった。1979年当時彼は、社民党員ではあったが、国会議員でもなく、政党政治の喧騒の外にいた。彼は、フィンランド中央銀行総裁という要職にあったものの、ある意味で傍観者であった。社民党の中に確固たる足場のないコイヴィストにとって、その内閣運営は、ケッコネン大統領をはじめとする有力政治家や政党幹部、そして政党や政党内部グループなどの国内諸アクターのあいだの危うい均衡の上で翻弄されざるを得なかった。しかもそうした国内アクター間の相互作用に、ソ連という国外アクターが参入することによって、対外関係が絡み合いつつ国内政治過程が形成されていくのである。そして何より特徴的なことは、こうした各アクターの交錯は、多かれ少なかれ「ポストケッコネン」の思惑によって突き動かされていたことである。

それでは次にこれら各アクターが、コイヴィストの首相就任にいかなる関心を抱いていたのか、またコイヴィストが首相に就任した意味について考察を進めることにしたい。

第2節 コイヴィストの首相就任をめぐる政治状況

1978年に実施された世論調査によると、次期大統領に望ましい人物として、コイヴィスト38%、ソルサ10%であった。コイヴィストが首相に就任した後の1980年6月の調査では、コイヴィスト43%、ケッコネン13%、ソルサおよ

びヴァユリュネン2%、カルヤライネン1%であった²⁸⁾。このようにコイヴィストに対する国民の支持（むしろ期待と言ったほうが適当かもしれないが）は、他の有力政治家より群を抜いて高かった。出身政党の社民党に確固たる支持基盤を持たないコイヴィストにとって、その権力の源泉は世論であったと言えるかもしれない。

コイヴィストを首相そして大統領へ押し上げた最大の要因が、この世論であったことはまず確かなところであろう。しかし実際の政治場裡において、ケッコネン大統領をはじめとする各政治アクターが、必ずしも世論にしたがってコイヴィストを支持したわけではない。そこにはそれぞれの政治的計算が見え隠れしているのである。以下ではコイヴィストの首相就任に関連して、主だったアクターの動向を見ていきたい。

まず閣僚任命権を持つケッコネンから述べていきたい。そもそもケッコネンは、コイヴィストを首相にすることは胸中気がすすまなかったようである。このケッコネンの消極的姿勢は、1970年に起きた「北欧経済機構」(NORDEK)問題とも関連していた。以下に NORDEK 問題について簡単に記しておく。

1970年当時の首相は、コイヴィストであった（第一次コイヴィスト内閣1968年3月22日～1970年5月14日）。彼は、NORDEK 結成について当時のフィンランドにおける重要な旗振り役であった。ケッコネンもこの計画には肯定的であったとされている。ケッコネンは、1970年2月24日～25日にソ連を訪問し、この問題についてソ連首脳の理解を求めたのであったが、ソ連側は、フィンランドの NORDEK 加盟に難色を示したのであった。その理由は、フィンランドが経済のみならず政治的にも西側に組み込ま

れることを恐れたためと見られる。このソ連側の懸念は、NORDEK 参加予定の国家が EC 加盟交渉の動きを見せたことにより、現実味を帯びることになる。このためコイヴィスト内閣は、1970年3月24日に NORDEK 加盟を断念せざるを得なくなった²⁹⁾。この一連の経緯の中でケッコネンは、コイヴィストの政治的能力に疑問を抱くようになったとされている。ケッコネンは、コイヴィストについて次のように評している。「コイヴィストは理解しがたい人物であり、何でも知っているかのようなエゴイスティックさに親しみを感じていなかった。このようなコイヴィストの姿勢は、(大統領あるいは首相) 候補者には求められていなかったし、特に対外政策上、致命的になる恐れもある」(括弧は筆者)³⁰⁾。

しかしながらケッコネンとコイヴィストのあいだに抜き差しならないほどの確執が生じていたかと言えば、そうでもなかったようである。コイヴィストの評伝を著したレヘティラは、両者のあいだで経済政策などをめぐって見解の相違があったものの、それは決定的なものではなく、1960年代から70年代にかけて両者の個人的関係は、むしろ近かったと述べている。実際ケッコネンが、コイヴィストをフィンランド中央銀行総裁に指名したのは、コイヴィストが経済の専門家として有能であることを評価した証拠である。また1979年にケッコネンは、テレビインタビューの中で、自分の後継者としてコイヴィストの名前をあげている。ケッコネンは後になってこの発言の箇所を削除させたけれども、少なくともコイヴィストの経済分野における有能さや国民的人気というものを認めていたと言えるだろう。

その一方でケッコネンは、コイヴィストにつ

いて冷ややかで突き放した見方もしていた。「コイヴィストは…横柄で自己満足の態度をとっている。…コイヴィストについては良い評価もあるが、重要な状況下で十分に強い姿勢ですばやく決定できるか疑問だ。コイヴィストの問題点は、過度に哲学的すぎることと優柔不断であることだ」³¹⁾。コイヴィストの「優柔不断さ」は、彼を首相の座から引き摺り下ろすことを意図する反コイヴィスト勢力にとって、格好の攻撃材料となった(「1981年政府危機」：次章予定)。いずれにせよケッコネンは、コイヴィストという人物にあまり好感を持っていなかったようであるし、少なくとも政治分野に限って見れば、その能力を疑問視していたようである。

それならケッコネンは、なぜコイヴィストを内閣首班に指名したのであろうか。それは、膨大なケッコネン研究で知られるスオミの言説を借りれば、「他に選択肢はなかった」からである³²⁾。既述した通り、組閣以前に首相候補として下馬評が高かった人物は、社民党ではコイヴィスト、ソルサ、中央党ではヴィロライネン、カルヤライネンであった。こうした人物のほかにケッコネンは、側近の一人中央党のウーシタロ(前出)、社民党のリーナマー(Keijo Liinamaa)、さらに社民党の女性閣僚テュオラヤルヴィ(注12参照)も腹案としてあったようである³³⁾。しかしこれらの案もさほど有効性を持ちえなかった。また首相候補の有力者上記4人のうち、ソルサとヴィロライネンの可能性が閉ざされたことについてはすでに述べた通りである。カルヤライネンについては、下記で述べる通り、ケッコネンとの関係が決定的に悪化していた。残された人物は、国民の人気が高いコイヴィストしかいなかったということになる。

次にカルヤライネンに関わる事情について述

べたい。彼は、もともとケッコネンの秘書出身で、二度の首相経験(1962年4月13日～63年12月18日、1970年7月14日～71年10月29日)のほかに数々の閣僚を歴任しており、当時のフィンランドでは有力政治家の一人であった。そして彼は、ケッコネンの「親ソ中立路線」の忠実な継承者と見られていた。また彼は、ソ連要人と関係が深いこともあって、ソ連経済と密接なつながりを維持してきたフィンランドの産業界の中では、カルヤライネンを支持する声が大きかった。こうしたことからカルヤライネンは、「ポストケッコネン」の最右翼と見られていたのである。

しかしケッコネンとカルヤライネンの関係は、1970年代初め頃から亀裂が生じ、70年代末に至って決定的に悪化したと言われている。両者の関係についてはすでに触れたけれども³⁴⁾、ここではソ連側が両者の仲介の役割を演じた経緯などを補足しつつ、カルヤライネンの次期首相の可能性が閉ざされた事情について述べることにする。

両者のあいだに、修復が全く困難になるほど深い亀裂ができた原因として考えられる出来事は、カルヤライネンが1974年大統領選挙に向けて、1970年頃から準備を始め、この動きをソ連側が支持したことである。ケッコネンをはじめとしてフィンランド要人と接触を重ねていた在フィンランド・ソ連大使館のウラディミロフ参事官(前出)によれば、ケッコネンは、ソ連側のカルヤライネンに対する同情や信頼が、何よりもケッコネンに向けられた同情や信頼を反映したものであることを理解していなかった。つまりケッコネンは、カルヤライネンがソ連の支持を得て、自分を権力の座から追い落とそうとしていると見たのである³⁵⁾。

さらに1977年に起きた同様の出来事が、両者の関係悪化を深刻にしたのであった。同年3月22日にケッコネンは、カルヤライネンを呼び出して、1978年大統領選挙に向けて準備をしているときめ付けて、彼を激しく詰責した。ケッコネンは、カルヤライネンを自分の後継者にすべく、以前から目をかけてきたが、もはや互いの友好・協力関係を継続させるのは不可能だと述べて、怒りをあらわにしたのであった。ケッコネンは、この情報の出所がステパノフ在フィンランド・ソ連大使 (V. S. Stepanov) とペルトゥネン大統領府官房長 (Juhani Perttunen, *Kansliapäällikkö*) であるとカルヤライネンに伝えている。

カルヤライネンはケッコネンに対して、自分に向けられた非難には根拠がないと述べて、ステパノフらの情報の信憑性を否定した。その後ケッコネンは自己の誤りを認め、謝罪したのであったが、カルヤライネンによれば互いの関係は、以前のように良好なものには戻らなかったようである³⁶⁾。ここで興味深いことは、両者の関係修復のために、ソ連外交官が奔走していることである。ウラディミロフの回顧録によれば、当時のコトフ参事官 (M. G. Kotov) が、カルヤライネンに対して、70年代初めの誤った行動 (1974年大統領選挙に向けた活動) について、ケッコネンに謝罪することを勧告し、ケッコネンには‘放蕩息子’に謝って、以前の良い関係に戻るべきだと説得した。さらに1977年に3度目のフィンランド勤務となったウラディミロフは、この仲裁の仕事を引き継いだのであった³⁷⁾。

この逸話は、ソ連側がケッコネンやカルヤライネンなどフィンランドの大物政治家と密接な個人的関係があったことの一つの証左であると言えよう。ソ連にとっては、そうした関係を通

じて、フィンランドの対ソ友好姿勢を維持していくことが大きな関心事であった。さらにこの逸話は、当時のソ連大使館内部が一枚岩ではなかったことを示している。ウラディミロフは回顧録の中で、ケッコネンに対してカルヤライネンの‘企て’を‘告げ口’した者が、ステパノフ大使であったとは述べていない。ウラディミロフは、「その名前については述べたくない」と記している。しかし彼によれば、「ソ連大使館のある職員が、ケッコネンの信頼を得るために、カルヤライネンがケッコネンに敵対する姿勢をとっているという情報を (ケッコネンに) 伝えた」 (括弧は筆者) のであった³⁸⁾。

ところでカルヤライネンについては、過度の飲酒による素行の問題が指摘されていた。特に本稿で取り上げている1979年5月26日の組閣との関連では、カルヤライネンが組閣目近の5月18日に、飲酒運転で警察の取締りを受けたことは特記しておくべきだろう。その後彼は、同年8月20日にロフヤ (Lohja) 地方裁判所で2万5,650マルッカという当時最大の罰金が課せられ、併せて1980年10月まで免許停止が命じられた³⁹⁾。彼がこの不始末を起こした時点では、前述の通り内閣首班はコイヴィストでほぼ帰趨が定まっていたが、カルヤライネンもかねてから首相候補の一人に取り沙汰されていた。さらに次期大統領候補の最有力者とも見られていた。したがってこの飲酒運転は、カルヤライネンの将来と指導者としての資質に大きな汚点をつけたと言えよう。

カルヤライネンと親しい関係にあるウラディミロフによれば、カルヤライネンの飲酒癖は、ケッコネンとの関係が冷却化し、大統領の座を手中にする可能性が不透明になったため、意気消沈した気分をアルコールで紛らわせようとし

たからだという。ウラディミロフは、たびたびカルヤライネンに対して飲酒を控えるよう忠告しており、カルヤライネン自身も飲酒を制限するつもりだったようである。しかしウラディミロフが述べているように、結局カルヤライネンの飲酒癖は、改まることはなかったようであり、メディアでも取り上げられたのであった。

ウラディミロフなどフィンランド在勤のソ連外交担当者は、1980年には大統領選挙の繰り上げ実施の可能性があると考えていた。これは彼らが、ケッコネンが高齢で健康不安を抱えているため、任期途中で引退もありうると考えていたからであろう。こうした認識に基づいてウラディミロフらは、大統領候補として予想される人物やカルヤライネンの「個人的問題」についてもモスクワへ報告している。ところがウラディミロフによれば、モスクワのカルヤライネンに対する評価は、変わらなかったという。つまりソ連指導部は、その品行が難詰されていたにもかかわらず、カルヤライネンがフィンランド次期大統領として望ましいと考えていたようである⁴⁰⁾。

次にソルサとコイヴィストの関係について述べたい。両者の関係について提起されるべき疑問は、後述するようにソルサがケッコネンに対して、次期首相に望ましい人物としてコイヴィストを推薦したのはいかなる理由によるものか、ということである。以下この点に留意しながら議論を進めることにする。

前述したように1970年代末のフィンランドにおいて、名実ともにソルサは、ケッコネンに次ぐ国家指導者であった。彼は、1972年と77年にそれぞれ首相の座に就くなど、政治的経験は豊富であった（その後82年と83年に首相就任、注1参照）。彼は1975年に社民党委員長に就任し

（～79年）、党内の各組織のみならず労組や共産党系の人民民主連盟からも支持を得ていた。実際に人民民主連盟の左派の中には、コイヴィストがブルジョワ寄りだという理由で、次期大統領候補にソルサあるいは親ソ色が濃いカルヤライネンを推す者が多かったのである。例えば共産党のサーリネン委員長（Aarne Saarinen, 1966～82年）は、ソルサを支持していた。

またソルサは、国際的にも知名度が高く、社会主義インターナショナル軍縮委員会委員長の活動（1978～80年）を通じて、ソ連の信頼を得ていた。彼はケッコネンに忠誠を誓いつつも、国内外で自己の政治的立場を強化していった。レコラ（前出）は、「ソルサは、首相として強力な政治家だった。……意見の違う者は切り離され、力をつけて浮上してきたものは押さえつけられた」とソルサの強権ぶりを描写している⁴¹⁾。多くの政治的経験を積んだソルサは、70年代末に至って左翼勢力側では随一の政治家であった。もはや彼には、大統領職以外の要職は残されていなかったのである⁴²⁾。

しかしながらソルサは、社民党の次期大統領候補にコイヴィストを擁立する構想を立て、そのための大きなステップとされた首相職に彼を据えるべく、1978年末頃から運動を行うのであった。まずソルサはコイヴィストに対して、「社民党の大統領候補として可能な限りの最善の人物は、マウノ・コイヴィストである」ことを伝えるとともに、「次期内閣には、首相か外相のポストに就くことを準備すべきだ。そうすれば、従来（コイヴィストに）欠けていた外交面での支持を得ることになるだろう」（括弧は筆者）と勧告したのであった。この時コイヴィストは、ソルサに対して明確な回答をしていない。1979年1月にソルサは、社民党のヘッレ副党首

(国会副議長、前出) とスンドクヴィスト書記長(Ulf Sundqvist)とともに、この件でコイヴィストの説得にあたった。コイヴィストは、首相就任には同意したが、大統領候補については議論を避けたのであった⁴³⁾。コイヴィストは、「個人的には首相を引き受けることに関心があった」と回顧録の中で述べている。ただし大統領職については、表立って野心を見せていなかった。この点についてコイヴィストは、1979年国会選挙前の時点で、ケッコネンの健康状態について実際の情報を入手していなかったし、彼が大統領を6年間の任期満了まで務め上げて、1984年にまた大統領として選出されること以外に考えはなかったと述懐している⁴⁴⁾。

しかしこのコイヴィストの言葉が、果たして彼の真意であったのか判断するには慎重を要する。前述した通り、選挙前からコイヴィストは、ソルサから社民党の大統領候補について打診されていたし、その過程でケッコネンの健康状態についての情報のやり取りがあったと考えても不思議ではないだろう。また、コイヴィストに対する国民の高い支持については、彼自身当然認識していたはずである。したがってソルサから大統領候補の打診をされて、コイヴィストの心境に何らかの変化が生じたと推測することも許されるのではないと思われる。

さてソルサは、1979年の国会選挙前に、ケッコネンに対しても「コイヴィスト首相案」を持ちかけている。ソルサは、その時の様子を次のように描写している。「ケッコネンに対して、あらゆる議論を駆使して説得した。それは全く困難で複雑な任務だった……結局ケッコネンは、(コイヴィスト首相案に) 納得したがずっと不機嫌だった」(括弧は筆者)⁴⁵⁾。ソルサはケッコネンに対して、コイヴィストを社民党の大統領

候補に擁立する件については伝えていないものと思われる。しかしとにかくソルサの叙述に従うならば、国会選挙が実施される以前の段階でケッコネンは、「コイヴィスト首相案」に不承ながら同意したのである。このケッコネン・ソルサ会談の様子は、コイヴィストにも伝えられていた⁴⁶⁾。こうしたことを踏まえて言えば、国会選挙前にケッコネンとソルサによって、ある程度の組閣のシナリオが作られていたと見ることができるかもしれない。

ソルサはさらに、スウェーデンのパルメ首相(Olf Palme) に対して、「自分の後はコイヴィストが首相になるだろう」と伝えていた。またソルサは、名前を伏せているものの、あるソ連の代表にも「コイヴィスト首相案」を知らせている。ソルサによれば、この人物から「不服のような質問があり、あまり支持しない」との発言があった⁴⁷⁾。

ソルサの「コイヴィスト首相案」は、ケッコネン引退を予想に入れた次期大統領問題と直結していたことは強調されなければならない。この点に関してソルサは、「コイヴィストと私のあいだでは大統領選挙問題について、1978年から79年のあいだに合意を見ていた。当時私は、二つの結論を考えた。すなわち国民は、内閣の顔ぶれの一新を欲しているということ、そして国民は、大統領の交替の時期が決定的に近づいていると感じているということである。したがってわれわれは、独自の候補を擁立しなければならない。コイヴィストは、社民党の将来の大統領候補である。このことは私にとって明らかであり、私は1976年から訴えてきた」と述べている。

しかしこの反面でソルサは、「コイヴィスト擁立」について、次のようにその苦しい胸の内を

吐露している。「率直に言えば、(コイヴィスト擁立の) 考えや計画の実行は、私にとって容易なプロセスではなかった。私は、瀬戸際まで追いやられて、そして非常に悔しい思いもしたので体調が悪くなった」(括弧は筆者)。それでは何がソルサを苦しめたのだろうか。筆者は、この点を明確に説明する資料を入手していない。しかし諸状況に基づいて推測すれば、次のように考えることができよう。例えばソルサは、「コイヴィスト擁立」に反対する人々の説得に苦慮したのかもしれない。それとも彼は、心中ではやはり自分が党の大統領候補になることに執着しており、これをめぐってコイヴィストを支持する勢力とのあいだで何らかの摩擦があったと仮定できるかもしれない。しかしコイヴィストに対する国民の支持が群を抜いて高かったため、やむをえず大統領候補をコイヴィストに譲らざるを得なかったのではないかと考えられるのである。ソルサは、両者の軋轢について直接的に裏付ける証言を残していないが、それを示唆するものとして、コイヴィストと彼の側近がソルサに対して「深い疑念」を抱いており、ソルサに対して「攻撃」が行われたことを述べている。ソルサは、「疑念」の内容について触れていないが、前述したサロラ=ヴァルコ社贈賄問題(第1節)に関するものであったと見ることもできよう。なおソルサは、「腰痛のためにソルサが(次期首相あるいは社民党の大統領候補を) 辞退した」(括弧は筆者)というコイヴィストの指摘を退けている⁴⁸⁾。

ソルサ自身は、公言していないものの、次期大統領の座を射止めようとする大望を少なからず抱いていたと思われる(実際ソルサは、1993年5月16日に実施された社民党の大統領候補選挙に立候補したが、アハティサーリ Martti Ah-

tisaari に大差で敗れた。1994年の大統領選挙でアハティサーリは、大統領に当選した)。しかしながら次期大統領選挙の帰趨を考える上で、コイヴィストに対する国民の人气が、ソルサを含めて他の有力政治家のそれよりも一段と高いものであったことは、ソルサにとって重要な判断材料となったことであろう。特にコイヴィストは、1979年当時フィンランド中央銀行総裁として、均衡財政を主唱しており、この点からも保守勢力の支持が期待された。一方で1979年国会選挙では、ソルサ内閣に厳しい審判が下ることが予想されていた。ソルサは、これらの事情を斟酌した上で、次期首相そして社民党大統領候補の道をコイヴィストへ用意したのであろう。つまりこのソルサの選択は、彼自身が「ポストケッコネン」の有力者の一人であったことと「コイヴィスト人気」との狭間で揺れた末の結果であったと考えられる。

しかしソルサの「コイヴィスト首相案」については、レヘティラの叙述に従えば、次のような二つの政治的計算が背後に見え隠れしている。第一にソルサは、社民党の党勢回復を期して、清新なイメージのコイヴィストを首相に据えることを考えていたのではないかということである。社民党党首としてソルサに与えられた課題の一つは、1980年10月19日~20日の統一地方選挙で勝利を収めることであった。そのためにソルサは、コイヴィストの存在を活用したかったものと思われる。その一方で第二の計算は、もしこの統一地方選挙で社民党が敗北を喫すれば、その責任を「コイヴィスト首相」に帰することができ、あらためて「ソルサ大統領」待望論が浮上するかもしれないという思惑である⁴⁹⁾。しかしこの地方選挙において、社民党は議席を増やしたため、コイヴィストの政治的立

場を突き崩す材料とはならなかった⁵⁰⁾。

コイヴィストとソルサは、常に連帯し円満な関係を維持していたわけではなかったようである。1970年代には、両者の関係が緊張しているとしきりに言われており、ソルサ自身も2人の間に激しい対立があったことを認めている。例えばソルサは、コイヴィストの見解が社民党と乖離していたと指摘する⁵¹⁾。これは、コイヴィストが財政均衡論者であったことから、社民党の中の積極財政論者と折り合いがつかなかったためであると思われる。実際両者の関係は、第二次コイヴィスト内閣が成立した後も、経済政策などをめぐってしばしば緊張を孕みつつ展開していくのである。そしてそれが、ケッコネンや中央党内部の親ケッコネン勢力によるコイヴィスト首相更迭工作と絡み合いつつ、複雑かつ劇的な権力闘争が演じられていくことになる(次章予定)。

次にソ連側が、コイヴィスト首相の誕生についていかなる反応を示したのか見ていきたい。ソ連大使館のウラディミロフ参事官は、回顧録の中で次のように述べている。「(1979年)5月27日にマウノ・コイヴィストは、内閣の陣容を発表した。詳細に分析した上での見解としては、この政府は、(ソ連の)対外政策上の見地からはいかなる疑念も呼び起こさないであろう。閣僚17名のうち、自分(ウラディミロフ)が個人的に面識がないのは4人だけ(氏名省略、いずれも政治的には有力者ではない)であり、残りの全員とは何回も会ってすでに緊密な友人関係を築いていた。したがって私は当然ながら、組閣の合意について、歓喜の言葉の混ざった秘密電報をモスクワに送ったのであった。ソ連共産党中央委員会国際部の中で、唯一不満であったのは、フィンランド共産党少数派(親ソ色が強い

勢力)の代表が入閣しなかったことである。しかし私は、そのことが問題であるとは全然思わなかった。この組閣に関してわれわれが行った分析において、最も重要な結論は、コイヴィストの首相就任によって、大統領選挙が事実上始まったということである」(括弧は筆者)⁵²⁾。

筆者は、このウラディミロフの言葉の中で次の二点を注目したい。第一にソ連側は、フィンランド政府の人事問題という他国の内政問題を、自国の対外政策上の利害と連動させて捉えていたことである。敷衍すればフィンランドの政権人事が、ケッコネンの「親ソ中立」という国是を逸脱しない範囲で行われるものであれば、政権のイデオロギーが共産主義であるか、あるいは資本主義であるかはソ連にとって第二義的な事柄であるということである。われわれは、ここにソ連の対フィンランド外交のリアリズムを見いだすことができるのである。

第二にソ連、少なくともウラディミロフを中心とする在フィンランド・ソ連外交官は、首相就任が次期大統領への大きな一歩をコイヴィストに与えたと理解していたことである⁵³⁾。そもそもウラディミロフたちに限ってみれば、1978年大統領選挙でケッコネンの五選が決まった頃には、すでにコイヴィストを後継者の一人として注目していた⁵⁴⁾。ソ連指導部も、コイヴィストの首相就任にそれほど難色を示していないようであった。

ところでコイヴィスト首相の誕生は、当時のフィンランド国民の政治意識の観点からどのように位置づけられるであろうか。それは既述したことと重複するけれども、コイヴィストの首相就任の背景には、国民の高い支持があったことがまず指摘されるべきであり、ケッコネンもこの点については、首相の任命にあたって敏感

にならざるをえなかったと考えられるのである。そもそも「コイヴィスト人気」なるものは、既成政党や職業政治家、そして何よりもケッコネン長期体制に対する国民の不信感や倦怠感と表裏していたと考えられる。このことを鋭く言い当てているのが、ヤコブソン (Max Jakobson) の分析である。彼は、国民の政党離れや国民が長すぎたケッコネン時代からの決別を望んでいることを指摘し、したがって既成の政党政治の垢にまみれていないコイヴィストに支持が集まったのだと分析している。しかしながらフィンランド国民が、1956年から始まったケッコネン体制において着実に培われてきた福祉社会や対ソ関係の安定に寄与した中立外交を否定しようとしたのではない。国内社会と対外関係の成熟を背景にして、フィンランド国民は、‘安定の中の変化’を望んでいたものであり、換言すればケッコネンから自立しようとしていたのだと言えるかもしれない。つまり、フィンランド国民の政治意識が成長したのだと意味づけることができよう。次のヤコブソンの言説は、国民の政治意識もしくは政治に対する欲求と言うべきものを的確に描写している。「フィンランド大統領はモスクワで選ばれるのだという考えが、国民の中に以前広く行きわたっていた。しかしソ連が、フィンランドの大統領選挙に正しい姿勢をとるだろうと信じるに足る理由はない」「諸政党は、ケッコネンの後継者 (カルヤライネン) を (次期大統領の) 候補に指名することを望んでいるが、国民は政党を飛び越えて自分の候補を求めている」(括弧は筆者)⁵⁵⁾。

以上述べてきたことを踏まえた上で、コイヴィストが首相に任命された意味は、どのように考えられるであろうか。それは、ケッコネンが自ら自分の時代に幕を閉じ始めたことを物語

るものであると言えよう。敷衍して言えばこの任命は、実際の権力の所在つまり大統領の座が、ケッコネンからコイヴィストへ移る政治的序章となっただけでなく、従来の政治のあり様の変化、すなわち既成のエリートやプロフェッショナルによる政治という様式だけではなく、国民参加の政治というもう一つの潮流が、大きなうねりとなって今までよりも前面に出てくるようになった契機を形成したと見ることもできよう。この新しい次元の政治の場では、一般的に言えば政党や政治家に対する国民の選好は、イデオロギーや政策、あるいは地縁・血縁などの前近代的要素よりも、政治家個人の人間性やムードといったものにより多く目が向けられる。コイヴィストの台頭は、そうした国民の気運に合致したものであったと言えるのかもしれない。

ここでコイヴィストの首相就任の背景について整理しておきたい。第一に1979年国会選挙で勝利した野党国民連合党のホルケリによる組閣失敗、第二にソルサ首相の辞意、第三にケッコネンは、社民党と中央党を中心とする左翼中道内閣の存続を支持していたこと、第四に首相の有力候補と見られていたヴィロライネンやカルヤライネンが、ケッコネンと不仲であったこと、第五にテュオラヤルヴィら他の‘代替候補’の実効性はさほどなかったこと、第六にコイヴィストへの国民の高い支持があったことである。これらのことから、ケッコネンによるコイヴィストの首相任命は、当時の政治状況の必然的帰結であったと結論付けることができるであろう⁵⁶⁾。

最後に次のことを付言しておきたい。それは、コイヴィストの首相就任の水面下で、彼の高い人気に対する嫉視があったということと、それゆえに彼が政治的陥穽に落ちることを密かに望

む勢力が存在していたとされていることである。このことは、彼の首相就任後の政権内部における対立を予告しているようであり、それだけにコイヴィストの首相としての立場が、容易ならざるものになるであろうことを予感させるようである。

真偽のほどは定かではないが、ケッコネンがコイヴィストを首相に任命したのは、「コイヴィストの回りの泡をつぶす」ためであったという話も取り沙汰された。この風評は、次のように解釈されている。すなわちコイヴィストが首相に就任したとしても、複雑な政治状況をうまく操作して乗り切れるほどの能力はないであろうから、やがて首相の座を投げ出さざるをえなくなるだろう。そうなれば次期大統領候補の有力者と目されたコイヴィストの立場は凋落し、「泡のような」実体のないコイヴィスト人気なるものはしぼんでいくだろう、ということである。さらに言うと、すでに述べたように首相就任前のコイヴィストは、権謀術数が跋扈する政界には属さず、フィンランド中央銀行総裁という「自由」な立場に身を置いており、そこから政治や経済に関する評論活動なども行っていた。したがって「象牙の塔」から「とてつもない集団」の中へ落とされれば、彼は混沌とした政治に蝕まれ、やがて朽ち果てるだろう、という思惑や期待がケッコネンによるコイヴィスト首相任命の裏に蠢いていたということである。そしてこのケッコネンの「思惑と期待」の行きつく先にあるものは、1984年大統領選挙で六選を目指すというあくなき権力欲である⁵⁷⁾。果たしてケッコネンが、こうした政治的計算をしていたかどうかを裏付けるほどの資料は見当たらないが、少なくとも側近のウーシタロなどは、ケッコネンは、1984年以降も大統領の職を務めることが

できると語っていた。また、第二次コイヴィスト内閣で外国貿易相に入閣したレコラによれば、中央党だけでなくコイヴィストの所属政党である社民党の中にも、コイヴィストが次期大統領になる可能性が潰えるが故に、首相として失敗することを期待する人々がいたと述べている⁵⁸⁾。実際コイヴィストは、「いや気を起こさせて首相辞任をしむける試みには、忍耐でのごまかすべきだ」、「辞任のあと諸問題は混乱したまま残され、恥すべき辞任ということになる」と述べている⁵⁹⁾。「辞任をしむける試み」とは、1981年春と秋の「政府危機」のことを指すものと思われる(次章予定)。このコイヴィストの言葉を念頭に置けば、コイヴィストの首相就任にかかわる「策謀」は、それなりの真実味を持って浮かび上がってくるのである。

注

第1節 国会選挙と組閣の経緯

1) ソルサは、下記の通り四回にわたって首相を務めた。

第一次：1972年9月4日～75年6月13日

第二次：1977年5月15日～79年5月26日

第三次：1982年2月19日～83年5月6日

第四次：1983年5月6日～87年4月30日

ソルサの経歴については、第2節を参照したい。

2) Suomi, Juhani, *Umpeutuva Latu:Urho Kekkonen 1976-1981*, Otava, 2000, s. 448.

3) *Ibid*, s. 457, 467.

4) 第二次ソルサ内閣末期の経済状況と1978年8月に発表された経済対策の概要は下記の通りである。

1970年の工業生産指数を100とした場合、76年末は130であったが、77年初めには115まで低下した。しかし78年末には135まで上昇した。

一方失業者は、75年初め頃は5万人以下であった。しかしそれ以降、年を追うごとに増加の一途をたどり、78年初めには20万人に迫る勢いであった。

ソルサ内閣は、78年8月に経済対策として、下記の事項を主な内容とする総額40億マルッカから成る第四次景気刺激策を発表した。

- ・雇用者側の社会保障費支払い負担の軽減を継続
- ・税控除金の払い戻しの迅速化
- ・地方投資の促進

しかしこのうち30億マルッカ以上を外国から借り入れたこともあって、政府の財政事情は急速に悪化した。したがって79年選挙の後に成立したコイヴィスト内閣の課題の一つが、財政の均衡化であったのである。*Mitä Missä Milloin* 1980, Otava, 1979, ss. 262-269.

5) 1975年および79年の国会選挙の結果は、*Mitä Missä Milloin* 1976, Otava, 1975, ss. 186-187. および *Mitä Missä Milloin* 1980, ss. 146-147を参照のこと。

6) Koivisto, Mauno, *Politiikkaa & Politiikointia* 1979-81, Kirjayhtymä, 1988, s. 39.

7) しかし反ケッコネンの急先鋒国民連合党のユンニラや立憲党のエフルンロートは、落選している。Suomi, *op. cit.*, s. 455.

8) *Ibid*, s. 467.

9) *Ibid*, s. 461.

10) *Ibid*, s. 474.

11) *Ibid*, s. 475.

12) *Ibid*, s. 479. Koivisto, *op. cit.*, s. 41.

首相任命のプロセスの中で興味深い逸話は、ケッコネンがフィンランド史上初の女性首相の誕生について念頭に置いていたことである。その人物は、当時の社会保健相テュオラヤルヴィ (Pirkko Työläjarvi、社民党) であった。ケッコネンは1979年5月7日から11日にかけて西独を訪問したが、この時テュオラヤルヴィを随行させた。彼は同地で、テュオラヤルヴィに首相の職を打診したのであったが、彼女は「機が熟していない」と断ったのである。ケッコネンはそれ以上テュオラヤルヴィに拘泥しなかったようである。ちなみにケッコネンは、5月4日にイギリスで女性首相 (サッチャー, Margaret Thatcher) が誕生した報道に接して、自分の案は「盗作になる」と言って残念がったという。Suomi, *op. cit.*, s. 475.

13) Koivisto, *op. cit.*, s. 42.

14) *Ibid*, s. 47.

15) Suomi, *op. cit.*, s. 481.

16) *Ibid*, s. 481.

17) *Ibid*, s. 482.

18) 本文29~30ページで述べたことに加えて、コイヴィストは、ケッコネンが組閣を急ぐように干渉したこと、また自由人民党を入閣させるように同党と交渉すべきだと口を出したことについても、ケッコネンに対して反感を持っていた。つまりコイヴィストは、ケッコネンが組閣の仕方を指図し、制約をはめようとしていることにいらだっていたのである。*Ibid*, s. 482.

19) Virolainen, Johannes, *Yöpakkasista ja juhannuspommiin*, Otava, 1982, s. 34.

20) *Ibid*, s. 27.

21) *Ibid*, s. 35.

- 22) *Ibid*, s. 37.
- 23) *Ibid*, ss. 36-38.
- 24) Koivisto, *op. cit.*, s. 54.
- 25) 組閣の最後の段階まで決まらなかった閣僚は、外国貿易相であった。中央党は、閣内で優位な立場を得るために、社民党と閣僚の数ではある程度の均衡を保ちつつも、実質的には支配下に置く非政党の官僚出身者を必要としていた。5月25日に行われた組閣協議の場においてヴィロライネン中央党党首は、コイヴィストに対して、スウェーデン人民党へ法相を配分し、外国貿易相についてはソルサ前内閣で閣僚を務めた官僚出身のレコラ(Esko Rekola)を横すべしとさせるのが最善の策ではないかと発言した。ヴィロライネンは、この時の様子を次のように描写している。「その時、『電話取次ぎ役』(*puhelinpäivystäjä*—ヴィロライネンはこの人物の名前を記していない)が私(ヴィロライネン)を部屋の隅まで連れて行って、『親分』(*Isäntä*)は、外国貿易相は、アミノフ(C. G. Aminoff、スウェーデン人民党)が適当だと考えているときさやいた。私は、コイヴィストに対して、もう一度レコラに電話して、外国貿易相を受けるべきだと説得することを頼んだ。『電話取り次ぎ役』が私の意見を聞いて、急いで『親分』へ伝えに行った。タンミニエミ(大統領公邸の所在地)では、私の罪の重さがさらに増えただろう」(括弧は筆者。引用中の「親分」とは、ケッコネンを示唆するものと思われる)。*Virolainen, op. cit.*, s. 38. Koivisto, *op. cit.*, s. 53. Rekola, Esko, *Viran Puolesta*, WSOY, 1998, ss. 247-248.

コイヴィストから電話を受けたレコラは、以前経験のあった財務相の職を内心では希望

- したが、外国貿易相の就任に同意した。これにより5月25日夕刻、組閣協議は最終的に合意に至ったのである。ヴィロライネンを始めとする中央党の指導者は、レコラが中央党の「持ち札」であると思っていた。ところがレコラは、中央党が演出した1981年夏から秋にかけての政府危機で、コイヴィストの「ジョーカー」として、コイヴィスト支持に回ったのである。Lehtilä, Hannu, *Tuntematon Koivisto*, Otava, 1998, s. 46.
- 26) Koivisto, *op. cit.*, ss. 46-47. Suomi, *op. cit.*, s. 483. Virolainen, *op. cit.*, s. 38.
- 27) Koivisto, Mauno, *Kaksi Kautta 1*, Kirjayhtymä, 1994, s. 15.

第2節 コイヴィストの首相就任をめぐる政治状況

- 28) Lehtilä, *op. cit.*, s. 46.
- 29) Saarinen, Aarne, *Kivimies*, Otava, 1995, s. 84.
- 30) Suomi, *op. cit.*, s. 465.
- 31) Lehtilä, *op. cit.*, ss. 76-77.
- 32) Suomi, *op. cit.*, s. 465.
- 33) *Ibid*, s. 467.
- 34) 坂上宏「1982年フィンランド大統領選挙(2)」、『九州情報大学研究論集』第5巻第1号、2003年、76-77ページ。
- 35) Vladimirov, Viktor, *Näin Se Oli...*, Otava, 1993, s. 361.
- 36) Karjalainen, Ahti & Tarkka, Jukka, *Presidentin Ministeri*, Otava, 1989, ss. 225-226.
- 37) Vladimirov, *op. cit.*, s. 362.
- 38) *Ibid*, s. 362.
- 39) *Mitä Missä Milloin 1980*, ss. 85-86.

- 40) Vladimirov, *op. cit.*, s. 364. Karjalainen & Tarkka, *op. cit.*, s. 242.
- 41) Rekola, *op. cit.*, s. 234.
- 42) Lehtila, *op. cit.*, ss. 49-50.
- 43) Sorsa, Kalevi, *Muistinkuvia Mielikuvia*, Otava, 1995, s. 111.
- 44) Koivisto, *Politiikkaa & Politikointia*, s. 12.
- 45) Sorsa, *op. cit.*, s. 111.
- 46) Koivisto, *Politiikkaa & Politikointia*, s. 41.
- 47) Sorsa, *op. cit.*, s. 111. Koivisto, *Politiikkaa & Politikointia*, s. 12.
- 48) Sorsa, *op. cit.*, s. 112.
- 49) Lehtila, *op. cit.*, ss. 49-50.
- 50) 1980年10月の統一地方選挙の結果については、*Mitä Missä Milloin 1982*, Otava, 1981, ss. 175-192. を参照りたい。
- 51) Sorsa, *op. cit.*, s. 110.
- 52) Vladimirov, *op. cit.*, s. 329.
- 53) *Ibid*, s. 381.
- 54) *Ibid*, ss. 325-326.
- 55) Jakobson, Max, *Vallanvaihto*, Otava, 1992, ss. 327-329.
- 56) Blåfield, Vuoristo, *Kun Valta Vaihtui*, Kirjayhtymä, 1982, s. 42.
- 57) Suomi, *op. cit.*, s. 479. Koivisto, *Politiikkaa & Politikointia*, s. 39.
- 58) Rekola, *op. cit.*, s. 234.
- 59) Koivisto, *Kaksi Kautta 1*, s. 15.